

Uwe Richter 先生との思い出

基盤教育部長 姜 奉植

Richter 先生はハイデルベルグ大学東洋学部を卒業され、1976 年にドイツ政府の国費留学生として北京大学に留学されました。北京大学では博士論文の執筆の傍ら中国語を習得されました。博士論文は『北京大学の文化大革命』という書名で岩波書店から出版されました。先生のご専門は、政治学及び歴史学でありましたが、岩手県立大学赴任後は研究活動を日・韓・中の文化比較にまで広げ、幅広く人文系の研究をされてこられました。

1980 年に来日して以来、ずっと日本に滞在し続け、岩手医科大学教養部を経て 1998 年、岩手県立大学開学と共に県大総合政策学部に着任されました。8 年後の 2006 年、学内改組により共通教育センターに移られ、不本意ながらセンター長をお勤めにならざるを得ない時期がありました。先生は、その後も口癖のように「自分は管理職には向いていない。二度とやりたくない一番苦手な経験だった。」と機会ある度に苦く言い漏らしていらっしゃいました。

さらに 8 年後の 2014 年にも改組があり、今度は共通教育センターが廃止され、前年に新しく発足した高等教育推進センターに移行され、来年 3 月をもって定年退職となります。本学勤務 18 年で教育・研究への貢献は元より存在感の大きい先生でありました。特に、高潔な人格の持ち主で、他人を悪く言うこともなく、他人に指示をすることもなく、ただただ黙々と一人で教育と研究に没頭してこられた正真正銘の学者でした。

2011 年の、あの思い出したくもない 3.11 の際には誰よりも先に率先してドイツ地方政府に働きかけ、数千万円分の支援物資を岩手県に送ってもらったのを記憶しております。先生の岩手を愛する心は、これに留まらず岩手に骨を埋める覚悟でいらっしゃり、既に自前の墓をお持ちだそうです。

一方で先生は、自然をととても愛され、大事にされ、それを行動で実践されてこられた、ナチュラリストでもあります。こういう先生の日頃の営みから教わったこと多く、私にとって Richter 先生はある意味で良き兄であり、尊敬する師でもありました。本当に無言の中で一教員として一人間としてその基本となるものを大事にされてこられた、大学教員の鑑と言っても過言ではないと思います。

振り返れば 15 年前の 2000 年に外国語教育実態調査の一環として、当時の板垣言語文化教育センター長と Richter 助教授、姜助教授、伊東助教授、王講師と共にドイツに行ったことがあります。その際、私は、フンボルト大学とベルリン自由大学等を調査に回りましたが、先生には同行していただき、すっかりお世話になりました。いま思い出せば懐かしい限りです。先生との思い出は数えるときがありませんので、このぐらいいしておきます。

今後は、お体を大事にされ、岩手で自然と末永くお幸せにお過ごしください。いままで色々とありがとうございました。